

長岡市埋蔵文化財調査報告書

天王遺跡

—県営経営体育城基盤整備事業（湯4期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2013

新潟県長岡市教育委員会

例　言

1. 本書は、新潟県長岡市寺泊白岩地内に所在する天王遺跡の発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、県営経営体育基盤整備事業（第4期地区）に伴うものであり、平成19年度に長岡市教育委員会が試掘確認調査を行い、平成23年度に、長岡市が新潟県長岡地域振興局から委託を受けて本発掘調査を実施した。
3. 試掘確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。また、本発掘調査に要した費用は、原因者である新潟県長岡地域振興局がその9割を負担し、残りの1割は長岡市が負担し国庫および県費の補助交付金を受けた。
4. 遺物の注記は、遺跡名「天王」の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 調査・整理体制は以下のとおりである。

(試掘確認調査) 平成19年度

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）

事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）

調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 加藤由美子

(本発掘調査) 平成23年度

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）

事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）

調査担当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 加藤由美子

調査補助員 松井 智（株式会社吉田建設）

現場代理人 德吉喜彦（株式会社吉田建設）

(整理作業) 平成23・24年度

調査主体 長岡市教育委員会（教育長 加藤孝博）

事務局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋茂人）

整理担当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 加藤由美子

6. 本書の執筆・編集は、田中 翔（長岡市教育委員会科学博物館）の指導の元、加藤由美子と松井 智が行った。

7. 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面・写真等の記録類は、長岡市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。（順不同・敬称略）

駒形敏朗 関 雅之 松島悦子 渡部集落 当新田集落 野積集落

三島郡北部土地改良区 新潟県長岡地域振興局 新潟県教育庁文化行政課

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯 ······	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境 ······	1
1 遺跡の概要	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 調査の方法と経過 ······	4
1 試掘確認調査	
2 本発掘調査と整理作業	
第Ⅳ章 調査の成果 ······	5
1 調査区の設定と基本層序	
2 遺構	
3 遺物	
第Ⅴ章 まとめ ······	8

挿図・表目次

第1図 遺跡の位置	2	第1表 周辺の遺跡	3
第2図 天王遺跡採集円面観測図	2	第2表 遺構観察表	9
第3図 周辺の遺跡	3	第3表 土器・陶磁器観察表	9
第4図 トレンチ配置	4	第4表 銅冶関連遺物・土鉢観察表	10
第5図 基本層序	5	第5表 銭貨・瓦石観察表	10
		第6表 柱・杭観察表	10

図版目次

図版1 調査区全体図	図版11 遺物実測図(5)
図版2 遺構分割図(1)	図版12 遺跡全景・基本層序・遺構写真(1)
図版3 遺構分割図(2)	図版13 遺構写真(2)
図版4 遺構分割図(3)	図版14 遺構写真(3)
図版5 遺構詳細図(1)	図版15 完掘・作業風景写真
図版6 遺構詳細図(2)	図版16 遺物写真(1)
図版7 遺物実測図(1)	図版17 遺物写真(2)
図版8 遺物実測図(2)	図版18 遺物写真(3)
図版9 遺物実測図(3)	図版19 遺物写真(4)
図版10 遺物実測図(4)	

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成14年6月、新潟県長岡地域振興局（以下、「振興局」）と、寺泊町教育委員会（以下、「町教委」）は、長岡市寺泊地域において計画された経営体育成基盤整備事業（潟地区）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。本事業は全事業面積505haを5期に分割して進める計画で、事業対象地には複数の周知の遺跡が存在し、さらに未周知の遺跡が存在する可能性が考えられた。そのため、工事に先立って町教委が試掘確認調査を行い、その調査結果をもとに再度両者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行うことで合意した。平成18年1月1日、寺泊町は長岡市と合併し、経営体育成基盤整備事業（潟地区）に伴う発掘調査事業も新市へと引き継がれた。

平成19年4月、潟4期地区（寺泊吉・寺泊京ヶ入・寺泊大地・寺泊本山・寺泊弁才天・寺泊箕輪・寺泊野積・燕市真木山・燕市渡部・燕市幕島）が事業採択されたことに伴い、長岡市教育委員会（以下、「市教委」）は、同10月1日から11月9日にかけて同地内での試掘確認調査を実施した。その結果、新たに中使面遺跡（後に稻場遺跡と統合）、幕島遺跡（燕市No.47）、そして本報告遺跡である天王遺跡（燕市No.119）の存在が明らかとなり、また、周知の遺跡である稻葉遺跡（長岡市No.1249）、範囲拡大を確認した。幕島遺跡と天王遺跡は燕市との市境に位置し、これまで燕市の周知の遺跡として周知されていたが、このたびの調査で長岡市域にまで遺跡が及ぶことが確認されたものである。平成22年6月、市教委と振興局はこの結果を元に再び協議を持ち、工事に際し十分な保護層が確保できる幕島遺跡は工事立会とし、工法上掘削が避けられない稻場遺跡と天王遺跡については本発掘調査とする方針を見出した。ただし、天王遺跡についても面工事部分は盛り土による遺跡の保護を行い、本発掘調査は工事による掘削が不可避な排水路・用水路部分に限定するものとした。振興局は平成22年7月1日付け長振農第3232号で、天王遺跡内における土木工事の通知を県教委へ提出した。これを受け、県教委から平成22年7月14日付け教文第462号で天王遺跡の本発掘調査の指示が出された。市教委と振興局は、本発掘調査を工事着手の直前に行うこととで合意した。

平成23年4月21日、振興局と長岡市は天王遺跡発掘調査の基本方針を定めた「天王遺跡に関する協定書」を締結した。協定書では、本発掘調査は市教委が調査主体となり平成23年度に実施すること、整理作業及び調査報告書は調査終了の翌年度中に刊行すること、事業にかかる費用は振興局が事業費全体の9割長岡市が1割を負担することが確認された。振興局は、同4月22日付け長振農第3070号で長岡市に協定書に基づく本発掘調査を依頼し、同5月2日、両者間で天王遺跡発掘調査の費用負担契約が締結された。

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 遺跡の概要

天王遺跡は、新潟県長岡市寺泊白岩字井崎地内及び燕市渡部に所在する（第1図）。ここは長岡市と燕市の市境に当たり、遺跡のすぐ北側には燕市渡部の集落が広がる。海岸線に平行して延びる東頬城丘陵（西側丘陵）は羊齒の葉状に無数の小丘陵が発達しており、遺跡はその小丘陵の東側斜面の裾部に立地する。現況は水田で、遺跡の規模は100m四方と推定され、現地の標高は14.3～14.8mである。

遺跡は、周辺で円面鏡（第2図）や須恵器等の古代の遺物が採集されたことにより周知化され、今回が初めての発掘調査となる。県内でも出土例が少ない円面鏡の採集は注目され、この遺跡の性格を考える上

で重要な要素となっている。

遺跡が所在する燕市渡部付近は、古代において越後国古志郡に属し、『延喜式』にある北陸道の「渡戸駅」の比定地とされる。また、鎌倉時代初期の和歌注釈書『袖中抄』に、弘仁2年(821)、国分寺の尼法光が「渡戸浜」に布施屋を建て、田四十余町と船二隻を寄付したとの記載があり、これも現在の渡部周辺であった可能性が高い。天王遺跡は、これまで南側の丘陵を越えたところに位置する宝崎遺跡と共に、これら駅家・布施屋の候補地のひとつと考えられてきた。また一方で、採集された円面硯に使用痕がないことから、付近の丘陵斜面を利用した須恵器窯の存在も指摘されてきた。〔駒形1987・1988〕



第1図 遺跡の位置 (1/250,000)

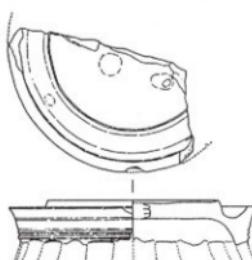
2 周辺の遺跡（第3図・第1表）

天王遺跡が立地する小丘陵の南側、現在の長岡市寺泊本山地区一帯には、大正期まで円上寺潟という大きな潟湖が存在した。今回の基盤整備事業名にある「潟地区」とは、この円上寺潟に由来する名称である。円上寺潟の他にも、国上山・弥彦山東麓一帯には大小の潟湖が存在していたことが知られ〔八重樫2004〕、現在に比べて遥かに潤湿な土地であった。

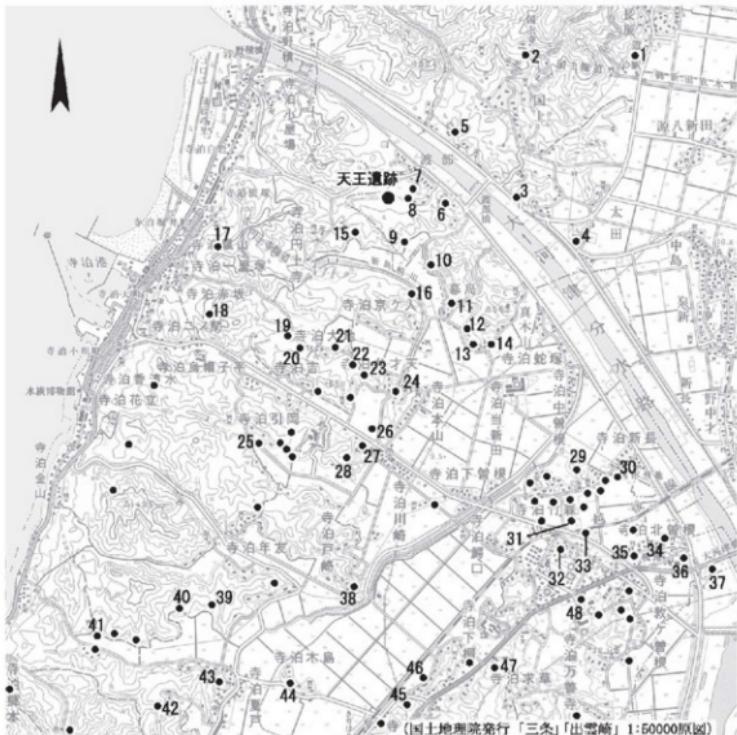
この地に初めて人が生活の根を下ろすのは、後期旧石器時代である。有馬崎遺跡(I)は国上山東麓に位置する後期旧石器時代から中世に至る複合遺跡で、平成4年に旧分水町が発掘調査を行い、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代草創期の石器が出土した。続く縄文時代以降の遺跡は、円上寺潟の汀線上や丘陵の裾部に立地する。縄文時代中期から晩期の宝崎遺跡(9)、後・晩期の幕島遺跡(11)では、大量の土器・石器が出土し、円上寺潟が人々にとって重要な食料獲得の場であったことを想起させた。

弥生時代に入ると遺跡数は減少し、遺跡の全貌が不明な竹ヶ花遺跡(4)や、橋梁工事で地表下約8mから弥生土器が出土した本山舞台島遺跡(24)、緑色凝灰岩やヒスイを用いた玉作が行われた諏訪田遺跡(31)が知られる。古墳時代の遺跡には、大河津分水路工事中に子持ち勾玉と須恵器の提瓶が出土した夕暮れの岡遺跡(3)がある。未だ周辺で古墳時代後期の集落跡は確認されていないが、暗にその存在を示唆する資料である。

奈良・平安時代には、縄文時代に繁栄した宝崎遺跡(9)で再び人々が生活を始める。白鳳期の寺院として知られる横瀧山庵寺跡(32)と同じ瓦が遺跡内に持ち込まれ、円上寺潟を介した内水面交通を利用して、両遺跡が何らかの関係を持っていたことが予想される。また、地図にはないが、東頭城丘陵の西側丘陵と東側丘陵の間を北流する島崎川の上・中流地城では、「沼垂城」「郡司符」木簡が出土した八幡林官衙遺跡や、下ノ西遺跡、門新遺跡など、古志都街や北陸道の駅家に関連する遺跡が登場する。



第2図 天王遺跡採集円面実測図 (1/4)



第3図 周辺の遺跡 (1/50,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	有馬崎	旧石器・縄文・古代・中世	17	坂井町塚	不明	33	京田	古代
2	国上寺遺跡群	古代・中世	18	赤坂山城	中世(南北朝)	34	野起	縄文・弥生・古墳
3	夕暮れの岡	古墳	19	稻場	古代	35	太屋敷	古代
4	竹ヶ化	弥生・古墳・古代・中世	20	幾箇	中世	36	北曾根	古代
5	居下	古代	21	向原敷	縄文・古代・中世	37	五千石	縄文・弥生・古墳・古代
6	渡部城	中世(戦国)	22	小丸山	縄文	38	熊ノ森	縄文
7	力ノ尾北	古代	23	弁才天窟	古代	39	川西	縄文
8	力ノ尾南	古代	24	本山舞台島	弥生	40	夏戸窯	古代
9	宝崎	縄文・古墳・古代	25	金八	縄文・古墳・古代・中世	41	吉竹北	古代・中世
10	穴ノ入	古代	26	居村前	縄文	42	田頭城	中世(市町)
11	墓島	縄文	27	法崎	縄文	43	夏戸城	中世(戦国)
12	新保入	縄文・古代・中世	28	七十歩	縄文	44	木島砦	中世(室町)
13	当新田山下	古代	29	竹森城	中世(室町)	45	山王	縄文
14	道上	古代か	30	草薙	縄文・弥生・古墳・古代	46	土手上	古墳・古代
15	丸田	古代	31	諏訪田	弥生・吉墳・古代・中世	47	下棚松業	縄文
16	京ヶ入	縄文・古代	32	横瀧山	縄文・弥生・古墳・古代	48	端端	縄文

第1表 周辺の遺跡

第III章 調査の方法と経過

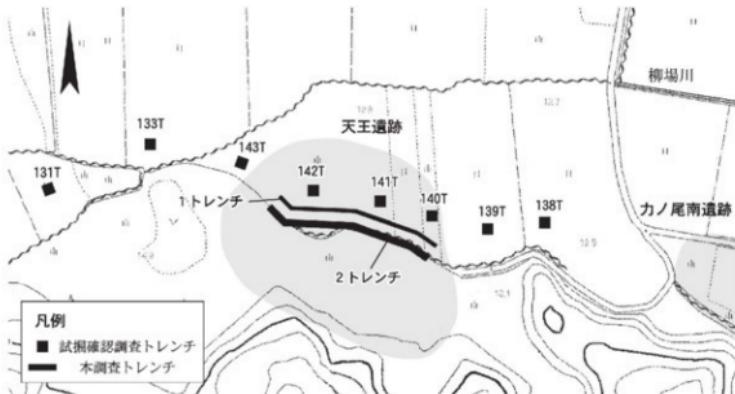
1 試掘確認調査

天王遺跡が含まれる湯4期地区的試掘確認調査は、市教委が主体となり平成19年10月1日から11月9日に実施した。総トレンチ数は143か所、調査総面積は858m²である。本遺跡以外の調査結果については、「平成19年度長岡市内遺跡調査概要報告書」を参照いただくとし、ここでは割愛する。そのうち、天王遺跡の確認調査トレンチは計3か所であり、調査総面積は18m²である。調査の結果、表土下20cmにおいて古代の遺物包含層を1層確認し、土師器・須恵器が出土した。また、直径30cmのビット1基を検出した。遺物・遺構とも量としては少ないが、過去に円面鏡が採集されている地点と工事予定範囲が近接していること、周辺の地形から他にも遺構が存在する可能性が高いことから、本発掘調査が必要と判断された。

2 本発掘調査と整理作業

本発掘調査は面工事の進捗状況に合わせて、平成23年度に実施した。5月24日から調査区の基本測量を行い、6月2日から重機による表土除去を行った。6月7日から作業員を動員し、人力による本格的な発掘調査を開始した。トレンチ壁の整形、サブトレンチの掘削を終え、12日からは遺物包含層の発掘、遺構の検出を行った。2トレンチの西端で土師器・須恵器片を大量に伴うSX01を検出し、更なる遺構の発見に期待が持てる幸先の良いスタートを切った。調査区の東半では、当初の想定以上に遺構面の削平が著しく、検出された遺構は深さのあるビットや杭を中心となつた。遺物は古代の土師器・須恵器を中心に、中世の珠洲焼が定量見られた。また、遺構もこの時期に伴うものと予想された。6月19日に地元住民に向けた遺跡見学会を行い、初夏の晴天の下、35人の来場者を得た。27日に調査区全体の完掘写真撮影を行い、測量と遺構の断ち割りを行い、7月11日に作業道具を現場から撤去し現場調査を終えた。

整理作業は、平成23年度に遺物の水洗い・注記・実測・観察表の作成、平成24年度に写真撮影・原稿執筆・報告書編集を行った。



第4図 トレンチ配置 (1/2,000)

第IV章 調査の成果

1 調査区の設定と基本層序

パイプライン予定部分（1トレンチ）と排水路予定部分（2トレンチ）にトレンチを設定した（図版1）。事前の測量調査では、基準杭1（日本測地系 座標値 X=183385.147, Y=26129.931）、基準杭2（日本測地系 座標値 X=183388.805, Y=26108.829）を設定し、ここから任意の10mメッシュのグリッドを設定した。グリッドは北西隅を基点とし、西から東へ向かって1から8の数字を、北から南に向かってAからCの英字を割り当てて大グリッドとした。さらに、各大グリッドを西から東へ2mごとに区切り、1から5の数字を割り当てて小グリッドとした。これら2つを組み合わせて、2B-3、5A-4のように表記し、遺物の出土位置や遺構の位置の記録に用いた。

調査地の周辺は丘陵裾の田んぼで、標高は14.5～14.7mである。調査区の南側は丘陵の裾部に接し、北側は現田面に接している。調査地周辺は、元々は南側の丘陵部から北側の田面へと緩やかに落ちる斜面であったが、耕作整理時に南側の斜面を一部削り出して平坦面を造成し、その上に現在の田面が構築されている。南側の丘陵裾部は羊齒の葉状に入り組む地形を呈し、山際から染み出る湧き水が小さな流れとなり、北側の低地部（現田面）へと集まる。一帯の地山は耐水性のある岩盤層で極めて水はけが悪く、場所によつては膝まで潜るほどの深田となっている。基本層序は、以下のI～IV層に分けられる。

I層：10YR5/2 灰黄褐粘質土（表土・現代の耕作土）

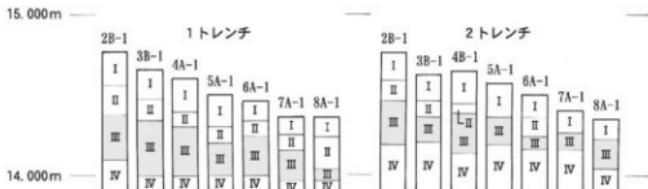
II層：2.5Y5/2 暗灰黄粘質土（近世・近代の耕作土、古代から近代の遺物包含層）

III層：2.5Y4/2 暗灰黄粘質土（古代・中世の遺物包含層、炭化物を多く含む）

IV層：2.5Y7/2 灰黄粘質土（地山）

2層ある遺物包含層のうち、II層に含まれる遺物は細片が多く、出土量もわずかである。これは、過去の水田耕作により、III層の遺物が破砕されてII層に灑き込まれた結果と考えられ、今回は調査対象から除外した。本遺跡の主となる包含層はIII層である。須恵器・土師器・珠洲焼等、古代から中世にかけての遺物が含まれ、遺構が密集する1～4グリッド付近に特に厚く堆積する。

調査区の中央部から東半にかけては耕作整理に伴う削平のため、遺物・遺構が少ない状況が見られた。このような場所では、かつては丘陵裾部が現田面に向かって大きく迫り出していたと考えられ、昭和の耕地整理の際に、田面高を合わせるために削平が行われた可能性が高い。また、2トレンチは現用の排水用（幅約1m）に重ねて調査区を設定したため、特に東半分は包含層・遺構の残りが悪かった。発掘調査はI・II層を重機で除去した後、III層で人力による包含層発掘を行い、IV層上面で遺構検出を行った。



第5図 基本層序 (1/30)

2 遺構（図版2～6）

遺構確認面はIV層上面で、溝（SD）3条、ピット（SP）28基、不明遺構（SX）3基を検出した。時期がわかる遺構は、古代のものが多い。1トレンチでは、北側の現田面へ向かって地山が緩やかに落ちていく状況が確認でき、旧河道SD02、自然の落ち込みSX03を検出した。地山面では常時水が染み出しており遺構は少ない。2トレンチではピット・溝のほか、トレンチ西端で旧河道と思われるSX01を検出した。

SD01（図版6） 1・2トレンチを南北に横断する溝である。現状はごく浅い縫みであるが、底面から少し浮いた状態で、縄文土器（2）や土師器（3～5）が出土した。縄文土器は流れ込みと考えられ、遺構の時期は土師器の時期から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

SD02（図版3） 当初は溝として調査を進めたが、後に旧地形の谷部に集まつた旧河道の痕跡と認定した。覆土に植物遺体と自然木を多く含み、今でも常時に水が湧き出る。遺構の底面は西半で急に深くなり、調査では比較的浅い西半の一部を確認するに留めた。覆土の4層には地山ブロックが混じる。遺物は2層から珠洲焼の壺底部（7）、4層から縄文土器（6）と思われる土器片が出土した。この旧河道の埋没年代を示す資料として注目される。

SD03（図版6） 1トレンチの西端で検出した。深さは11cmと浅いが、古代の遺物が一定量出土した。中でも、羽口（11・12）が出土しており注目される。溝の両端はトレンチの外へと伸びている。

SP05（図版5） 上部が大きく削平されており、検出面からの深さは10cmと浅い。柱根が出土した。掘り方の規模や柱根から建物を構成するピットと考えられ、近接するSP07が対になるか。

SP06（図版5） 2本並んだ打ち込み式の杭（109・110）である。検出面はIV層であるが、杭の先端部の劣化があり進んでいないこと、調査前はSP06の位置に現代の土側溝が走っていたことから、近・現代の水田耕作に伴う杭の可能性が高い。

SP07（図版5） 深さ45cmを測り、今回検出した中では最もしっかりした掘り込みを持つ。サブトレンチ掘削時に検出し、平面形は不定形を呈す。先端に丁寧な加工を施した柱根（111）が出土した。遺物は伴わないが、柱根の腐朽状態から、古代もしくは中世の時期に比定される。

SP10・11・12・13・15・16（図版5） 検出状況から、元は複数本の杭が20～25cm間隔に平面L字形に配されていたと考えられる。SP12（112）、SP13（113）、SP16（114）の3本の打ち込み式の杭が現存する。これらはSP06同様、近・現代の水路に伴うものと考えられる。

SP17（図版5） 直径が94cmと大きく、ピットよりむしろ土坑として捉えるべき遺構である。深さは18cmで、断面形は弧状を呈す。次に述べるSP18同様、性格が不明の遺構である。遺物は出土していない。

SP18（図版5） SP17に接する平面長梢円形のピットである。覆土から木材（115）が出土したが、腐朽が著しく柱根か自然木かの判断ができない。掘り込みの断面が不定形で浅いため、柱穴の可能性は低い。

SP19・21・26・27（図版5） 2トレンチ西端、SX01の西側で検出した杭打ち込み式の杭群（116～119）である。性格は定かでないが、何らかの水路に伴う杭と考えられる。

SP28（図版6） SX01上面で検出した。加工痕を持たない二俣に分かれた自然木（120）が、打ち込み式の柱として使われている。後述するようにSX01は中世以前の旧河道と考えられ、それが完全に埋没した後にSP28が打ち込まれる。SX01の覆土は炭化物や植物遺体を多く含む軟弱な地盤なため、打ち込まれた柱根が自重により沈み込んでいる様子が確認できる。

SP29（図版6） SX01の底面で検出したが、調査時のSX01は常に水が湧き、平面での上層観察が難しかっ

たため、本来の検出面は SX01 の覆土中または上面にあった可能性が高い。断面形は逆台形を呈し、柱穴としての特徴を有する。近接する SP31と共に、何らかの建物を構成すると考えられる。土師器の無台杯(1)が出土した。

SP31 (図版 6) SX01 覆土中で検出した。柱根 (121) を伴う。SP29 と同様の理由から、本来の掘り込み面は SX01 の上面にあった可能性が高い。SX01 の覆土が軟弱なため、柱根が自重で沈み込んでいる。

SP35 (図版 6) 2 トレンチ北壁に沿って設定したサブトレンチ内で検出した。先端を丹念に加工した柱根 (122) を伴う。何らかの建物を構成する柱穴となると考えられるが、建物の復元には至らなかった。

SX01 (図版 2) 2 トレンチの西側で検出し、その大半は南側調査区外へと伸びている。調査時に常に水が湧き、底面まで調査できなかった。覆土に白色砂・地山・植物遺体を多く含むことから旧河道と考えられ、覆土の堆積状況から河道の範囲を何度か変えていると推測される。1 層から珠洲焼の壺 (51) が出土していることから、旧河道が機能していた時期は中世以前であり、中世以降に埋没したと考えられる。本遺構の範囲内に SP28・29・31 が検出されているが、前述のとおり本遺構が埋没した後の遺構と考えられる。遺物は土師器の壺 (14・28)・無台杯 (15~27)・内面黒色無台杯 (29)・黒色土器の壺 (30)・器台や皿・甕・鏡 (31~39)、須恵器の横瓶 (40)・大甕 (41・43)・壺 (42)・杯 (44~50) が出土した。

SX02 (図版 6) 2 トレンチの北西壁で検出し、半分は調査区外へと伸びている。全容は不明であるが、平面は梢円形を呈すと思われ、直径は現状で 2.32m を計る。形状・規模から井戸の掘り方の可能性も考えたが、確証は得られなかった。遺物は土師器の細片が底面より浮いた状態で出土した。

SX03 (図版 4) IV 層の下部で検出した自然の落ち込みである。当初は下層遺構を想定して調査を行ったが、西から東に向かって覆土が緩やかに落ち込み続け、東側の遺構プランがはっきりしないため、自然堆積と判断した。堆積の上部で、後世の擾乱に伴う越前焼の壺体部 (13) 1 点が出土した。

3 遺物 (図版 7~11)

コンテナ 5 箱分が出土した。出土地点の内訳は SX01 が最も多く、全体の 4 割を占める。一方で遺物を全く伴わない遺構も半数以上あり、調査面積に対する出土遺物量は少ない。種別は縄文土器、古代の土師器・須恵器、珠洲焼、鍛冶関連遺物、土錠・古鏡、砥石の他、柱根・杭等の木製品があり、主体を成すのは古代の土師器・須恵器である。以下、遺構出土・包含層出土の順に記載し、柱根・杭は最後にまとめる。

SP29 (1) 土師器の無台杯 (1) は摩滅が著しく、底部外面に糸切り痕がわずかに認められる。

SD01 (2~4) 外面が肥厚する縄文時代晚期の深鉢の口縁 (2) と、内面に黒色処理を施した土師器無台杯 (4・5) 等がある。5 は内外面共に密なミガキが施され、時期は 9 世紀後半と考えられる。

SD02 (6・7) 縄文土器の体部 (6) は破片の上半に文様があった可能性があるが、摩滅のため判別できない。珠洲焼の壺底部 (7) は底径が小さく、逆八の字に大きく開く器形が特徴である。外面にケズリ調整を行なうなど比較的丁寧な作りで、13 世紀代のものと考えられる。

SD03 (8~12) 羽口 (11・12) は外面が被熱により発泡し、12 は一部が黒色ガラス化する。共に内面には通風孔が残る。土師器・須恵器 (8~10) から詳細な時期を想定するのは難しく、概ね平安時代である。

SX01 (14~51) 土師器の無台杯 (15~27) は、ほぼ全ての底部に糸切り痕が残る。内面黒色の無台杯 (29) は、体部が急な角度で外方へ開く器形に特徴がある。黒色土器の壺 (30) は、内外面に密なミガキが施され、黒色土器でも古い様相が認められる。時期は 10 世紀代と考えられる。器台 (31) は粘土の輪積み痕が

明瞭に残り、内外面には比熱による黒斑が認められる。柱状の高台（32）は皿または塊と考えられ、11世紀後半に比定される。鍋（36）は内面にはこげが付着する。37は長胴壺で、内外面に密なヨコナデが施され、タタキ調整は認められない。須恵器には横瓶（40）、大甕（41・43）、壺（42）、無台杯（44～50）があり、48の底部外面には「方」と読める墨書きがある。この調査で出土した唯一の墨書き土器である。珠洲焼の壺（51）も出土しており、SX01は9世紀から13世紀頃までの比較的広い時間幅を持つことがわかる。

SX03（13） 越前焼の大甕の体部（13）に簾状文の押印が見える。時期は13世紀と考えられる。

置構外（52～108） 古代の土師器（53～57）・須恵器（58～85）が多い。61は典型的な小泊窯産の須恵器無台杯で9世紀半ばのものである。他の須恵器も、概ね9世紀代から10世紀前半にかけての時期が考えられる。86～95は珠洲焼で、7は掘り目を持たない鉢、88・90・91は掘り鉢である。91の掘り目は不規則に施されており、12世紀末頃に位置付けられるか。96は唐津焼の碗である。98は内面に劃花文がある13世紀の青磁碗である。89～106は土錐で103～106は一括で出土した。大きく欠損しており、一括廃棄されたものと考えられる。107は頁岩製の砥石で、108は天聖元年（1023）初鉄の北宋銘「天聖元寶」である。

柱根・杭（109～122） 確実に柱根とわかるものはSP07（111）、SP28（120）、SP31（121）、SP35（122）の計4本あり、底部の加工が平坦なもの（111・121）と鋭角なもの（122）が見られる。SP28・SP31・SP35は、いずれもSX01上面から掘り込まれるビットという意味では同類だが、柱根に寄りはつりが行なわれる121・122と、自然木がそのまま利用される120との違いがある。杭は時期が新しいものも含めて、SP06（109・110）、SP12（112）、SP13（113）、SP16（114）、SP19（116）、SP21（117）、SP26（118）、SP27（119）の計9本が確認され、いずれも先端部を3～6方向から加工し尖らせる。

第V章　まとめ

調査の結果、天王遺跡の主体となる時期は9世紀から13世紀代であることがわかった。これは、北陸道の渡戸駅が機能し、「袖中抄」にある国分寺の尼法光が布施屋を建てた時期と少なからず重なる。しかし今回の調査では、それらを積極的に説明する遺構・遺物は確認できなかった。また、従来言われてきた天王遺跡の須恵器窯跡説は、灰原に伴うような遺物が全く出土しなかつたため弱くなったと言える。一方、食膳具や土錐、鍛冶の羽口等が出土したことで、古代の人々がこの地で生産を伴う営みを繰り広げていたことが証明された。その観点に立つと、天王遺跡は近接するカノ尾南遺跡・カノ尾北遺跡と共に、現在の護岸集落の祖形と見なすこともできる。また、旧河岸 SX01埋没後にSP28・29・31が掘り込まれる事実は、中世に至ってもこの場所が生活の場として機能していたことを示している。

調査を通じて遺構・遺物は2トレーナーに多い傾向があり、遺跡の中心は今回の調査地より南側、丘陵裾部に近いところに広がっていると考えられる。今後の課題として、遺跡における円面鏡の存在価値を再考証した上で、発掘調査成果と合わせて改めて天王遺跡の性格を考える必要があるだろう。

参考文献

- 駒形 執朗 1987 「天王探集の円面鏡」『歴歩第五号』分水懇歩会
駒形 執朗 1988 「分水町の古代遺跡」『新潟県の歴史と民俗』駒形監修先生退職記念事業の会
田中 一穂 2004 「北陸道渡戸駅に関する考察」『町史研究分水』第4号 分水町史編さん委員会
寺 泊 町 1991 「寺泊町史」資料編1原始・古代・中世
分 水 町 2004 「分水町史」資料編1考古・古代・中世
八重樫由美子 2004 「遺跡分布から見る分水町の歴史と古環境」『町史研究分水』第4号 分水町史編さん委員会

第2表 造構觀察表

測定番号	測定器名	位置				測定(m)	測定結果(cm)	方位	備考
		1面シングル	ダブル	袖山部	平野部				
6	SD01	LT-1	3A-4~2B-3	IV層	-	偏状	(1.92) 1.32~1.58	0.12	N=18° E
		LT	3B-3~4	IV層	-	偏状	(2.80) 1.09~1.42	0.12	N=17° W
3	SD02	LT	4A-3~MA-3	IV層	-	偏状	(1.62) 5.4~9.8	0.07	N=10° W
6	SD03	LT	4B-6~2B-2	IV層	-	偏状	(4.26) 0.4~9.8	0.11	N=6° W
	SP01	LT	6A-2	IV層	円形	偏状	0.33	0.31	N=12° E
	SP02	LT	7A-3~4	IV層	円形	偏状	0.12	0.08	N=24° E
	SP04	LT	TA-1	IV層	円形	U型状	0.13	0.12	N=17° W
	SP05	LT	GA-5, TA-1	IV層	(複数層)	偏状	(0.90) 0.36	0.19	14.09 N=5°
	SP06	LT	GA-6	IV層	-	-	-	0.39	13.88
	SP07	LT	GA-6	IV層	不規則	U型状	(0.46) 0.15	0.45	13.72 N=7° W
	SP08	LT	GA-2~3	IV層	円形	偏状	0.94	0.92	N=52° E
	SP10	LT	GA-2	IV層	円形	偏状	0.13	0.11	N=5° S
5	SP11	LT	GB-2	IV層	複数層	U型状	0.11	0.09	N=44° W
	SP12	LT	GB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.92
	SP13	LT	GB-2	IV層	-	-	-	0.39	13.98
	SP16	LT	GA-3	IV層	円形	V型状	0.09	0.08	N=9° E
	SP17	LT	GB-2	IV層	-	-	-	0.31	13.91
	SP18	LT	GA-1	IV層	長楕円形	偏状	0.94	0.92	N=44° W
	SP20	LT	IB-5, GB-1	IV層	圓形	偏状	0.06	0.18	N=5° S
	SP21	LT	IB-4	IV層	圓形	偏状	-	0.14	14.09 N=42° W
	SP22	LT	IB-5	IV層	不規則	偏状	0.30	0.17	14.09 N=5° W
	SP24	LT	IB-5	IV層	三角形	U型状	0.24	0.16	N=54° E
	SP25	LT	IB-4	IV層	圓形	偏状	0.91	0.86	N=6° E
	SP26	LT	IB-5	IV層	-	-	-	0.28	13.84
	SP27	LT	IB-1	IV層	-	-	-	0.21	14.05
	SP28	LT	IB-2	IV層	複数層	U型状	0.31	0.35	N=21° W
	SP29	LT	IB-2	IV層	複数層	U型状	0.36	0.39	N=19° W
	SP30	LT	IB-2	IV層	円形	偏状	0.19	0.18	N=18° E
	SP31	LT	IB-2	IV層	複数層	U型状	0.36	0.30	N=23° W
	SP32	LT	IB-1	IV層	-	-	-	0.22	13.77
	SP33	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP34	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP35	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP36	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP37	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP38	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP39	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP40	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP41	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP42	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP43	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP44	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP45	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP46	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP47	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP48	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP49	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP50	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP51	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP52	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP53	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP54	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP55	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP56	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP57	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP58	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP59	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP60	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP61	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP62	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP63	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP64	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP65	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP66	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP67	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP68	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP69	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP70	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP71	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP72	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP73	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP74	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP75	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP76	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP77	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP78	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP79	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP80	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP81	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP82	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP83	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP84	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP85	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP86	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP87	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP88	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP89	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP90	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP91	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP92	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP93	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP94	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP95	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP96	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP97	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP98	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP99	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP100	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP101	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP102	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP103	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP104	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP105	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP106	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP107	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP108	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP109	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP110	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP111	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP112	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP113	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP114	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP115	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP116	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP117	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP118	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP119	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP120	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP121	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP122	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP123	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP124	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP125	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP126	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP127	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP128	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP129	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP130	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP131	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP132	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP133	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP134	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP135	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP136	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP137	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP138	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP139	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP140	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP141	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP142	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP143	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP144	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP145	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP146	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP147	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP148	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP149	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP150	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP151	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP152	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP153	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP154	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP155	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP156	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP157	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP158	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP159	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP160	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP161	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP162	LT	IB-2	IV層	-	-	-	0.29	13.77
	SP163	LT	IB-2	IV層	-	-			

第3表 土器・陶磁器観察表(2)

回数	遺物	出土位置	種別	表面	形状(cm)		底成	土色	調査		備考
					口径	底径			内面	外面	
68	2T 29-3, BC-3	SD01 1層	直腹盤	平	16.0		口縁斜/4	灰	ナダ	ナダ	
53	2T 29-2	SD01 1層	直腹盤	底			底面斜/6	灰	ナダ	ナダ	調文食器
52	-		直腹盤	底			底片	ナダ	ナダ	ナダ	直腹底切込
53	2T 29-3	直腹	直腹盤	底	4.8		底面斜/1	灰	ナダ	ナダ	
54	2T 29-4	直腹	直腹盤	底	3.6		底面斜/2	灰	ナダ	ナダ	
55	2T 29-5	直腹	直腹盤	底	6.8		底面斜/3	灰	ナダ	ナダ	
56	2T 29-6	直腹	直腹盤	底	28.0		口縁斜/13	ナカサギ型	ナダ	ナダ	
57	2T 29-7	直腹	直腹盤	底	1.6		口縁斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
58	2T 29-8	直腹	直腹盤	底	13.4		口縁斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
59	-		直腹盤	底	12.2		口縁斜/8	ナカサギ	ナダ	ナダ	
60	1T 6A-5, 19-3	直腹	直腹盤	底	12.6		口縁斜/8	ナカサギ	ナダ	ナダ	
61	2T 7A-3	直腹	直腹盤	底	13.4		口縁斜/8	ナカサギ	ナダ	ナダ	
62	2T 7A-19-6	直腹	直腹盤	底	15.4		口縁斜/12	ナカサギ	ナダ	ナダ	底部へ少安
63	2T 7A-19-7	直腹	直腹盤	底	12.4		口縁斜/6	ナカサギ	ナダ	ナダ	
64	2T 7A-19-8	直腹	直腹盤	底	6.8		底面斜/4	灰	ナダ	ナダ	底部斜面へ少切
65	1-TT 6A-5, 19-1	直腹	直腹盤	底	7.8		底面斜/2	灰	ナダ	ナダ	
66	2T 19-8	直腹	直腹盤	底	8.0		底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	底部斜面へ少切
67	2T 5A-4	直腹	直腹盤	底	8.6		底面斜/10	ナカサギ	ナダ	ナダ	
68	2T 5A-4	直腹	直腹盤	底	7.0		底面斜/6	ナカサギ	ナダ	ナダ	
69	1T 7A-3	直腹	直腹盤	底			つまみ/3	ナカサギ	ナダ	ナダ	
70	1T 7A	直腹	直腹盤	底			底面斜/12	ナカサギ	ナダ	ナダ	つまみ欠損
71	2T 19-4	直腹	直腹盤	底	13.0		口縁斜/9	ナカサギ	ナダ	ナダ	
72	2T 19-4	直腹	直腹盤	底	14.4		口縁斜/5	ナカサギ	ナダ	ナダ	
73	2T 5A-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
74	-		直腹盤	底			口縁斜/8	ナカサギ	ナダ	ナダ	
75	1T 6A-5, 19-3	直腹	直腹盤	底	4.8		底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	底部へ少切
76	2T 3A-2	直腹	直腹盤	底	9.8		底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
77	2T 3A-2	直腹	直腹盤	底	14.4		底面斜/5	ナカサギ	ナダ	ナダ	
78	2T 3A-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/6	ナカサギ	ナダ	ナダ	
79	2T 19-1, 2B-4	直腹	直腹盤	底	18.6		口縁斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
80	1T 5A-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
81	1T 7A-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
82	1T 7A-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
83	1T 4A-5, 19-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
84	2T 19-1, 5A-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	2B-1同一直体
85	2T 19-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/4	ナカサギ	ナダ	ナダ	
86	1T 4A-5, 19-3	直腹	直腹盤	底	33.4		口縁斜/10	ナカサギ	ナダ	ナダ	底面斜
87	1T 3B-1	直腹	直腹盤	底	26.0		口縁斜/10	ナカサギ	ナダ	ナダ	
88	1T 6A-5, 19-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/16	ナカサギ	ナダ	ナダ	
89	2T 19-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/14	ナカサギ	ナダ	ナダ	
90	2T 6A-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/15	ナカサギ	ナダ	ナダ	
91	2T 6A-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/13	ナカサギ	ナダ	ナダ	
92	2T 19-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
93	2T 19-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
94	2T 19-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
95	2T 19-5	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
96	2T 19-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
97	2T 30-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
98	2T 30-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
99	2T 19-1, 2B-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/16	ナカサギ	ナダ	ナダ	
100	2T 19-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/16	ナカサギ	ナダ	ナダ	
101	2T 19-3	直腹	直腹盤	底			底面斜/15	ナカサギ	ナダ	ナダ	
102	2T 5A-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/13	ナカサギ	ナダ	ナダ	
103	2T 5C-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
104	2T 2C-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
105	2T 2C-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
106	2T 2C-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
107	2T 5C-4	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
108	2T 3B-2	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
109	2T 19-1	直腹	直腹盤	底			底面斜/7	ナカサギ	ナダ	ナダ	
110	2T 6A-5	SP06	IV層	灰	41.1	4.9	4.9	灰	ナカサギ	ナダ	北西の坑、上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個
111	2T 6A-5	SP06	IV層	灰	41.6	4.0	6.6	灰	ナカサギ	ナダ	南東の坑、上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個
112	2T 6A-5	SP07	Ⅳ層	灰	40.5	9.5	8.8	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、平底
113	2T 6A-5	SP12	IV層	灰	22.1	9.2	3.8	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、平底
114	2T 6A-5	SP12	IV層	灰	22.8	9.5	3.8	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、平底
115	2T 6A-5	SP12	IV層	灰	18.9	3.0	3.0	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、平底
116	2T 6A-5	SP18	IV層	灰	18.5	3.9	5.6	灰	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓
117	2T 6A-5	SP19	IV層	灰	37	5.9	5.9	灰	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)
118	2T 6A-5	SP21	IV層	灰	25.6	3.7	3.7	灰	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)
119	2T 6A-5	SP26	IV層	灰	25.3	3.5	3.8	灰	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)
120	2T 6A-5	SP27	IV層	灰	13.4	2.6	2.5	灰	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)
121	2T 29-2	SP28	SD01上	灰	83.2	36.6	36.0	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個
122	2T 29-1	SP29	SD01上	灰	52.6	17.5	17.5	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個
123	2T 29-1	SP29	SD01上	灰	48.9	16.5	15.5	灰	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個

第4表 鋼冶・鍛冶窯跡表

回数	遺物	出土位置	種別	石軸	形状(cm)		底成	土色	調査		備考
					底径	高さ(底)			内面	外面	
7	1T 1B-5, SD03	1層	鍛冶	4.1	3.0	1.4	14	先端斜片	灰	ナダ	被覆により形状化
8	1T 1B-5, SD03	1層	鍛冶	3.3	2.8	1.1	6	上部斜片	灰	ナダ	被覆により形状化
9	2T 19-1	鍛冶	石軸	2.0	2.6	1.4	14	上部斜片	灰	ナダ	被覆により形状化
10	2T 19-1	鍛冶	石軸	4.7	4.5	1.5	15	上部斜片	灰	ナダ	被覆により形状化
11	2T 19-1	鍛冶	石軸	6.0	4.0	4.0	15	上部斜片	灰	ナダ	被覆により形状化
12	2T 19-1	鍛冶	石軸	6.9	4.3	4.3	88	2/4	灰	ナダ	被覆により形状化
13	2T 19-1	鍛冶	石軸	2.8	3.8	2.8	15	上部斜片	ナカサギ	ナダ	被覆により形状化
14	2T 19-1	鍛冶	石軸	2.8	3.8	2.8	15	上部斜片	ナカサギ	ナダ	被覆により形状化
15	2T 19-1	鍛冶	石軸	18.5	3.0	3.0	3.0	ナカサギ	ナダ	被覆により形状化	
16	2T 19-1	鍛冶	石軸	37	5.9	5.9	5.9	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓	
17	2T 19-1	鍛冶	石軸	25.6	3.7	3.7	3.7	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)	
18	2T 19-1	鍛冶	石軸	25.3	3.5	3.8	3.8	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)	
19	2T 19-1	鍛冶	石軸	13.4	2.6	2.5	2.5	ナカサギ	ナダ	前壁内側、底に埋められた窓(はづき窓)	
20	2T 19-2	鍛冶	石軸	83.2	36.6	36.0	36.0	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個	
21	2T 19-2	鍛冶	石軸	52.6	17.5	17.5	17.5	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個	
22	2T 19-1	鍛冶	石軸	48.9	16.5	15.5	15.5	ナカサギ	ナダ	上部裏壁、複数の尖底(はづき底)3個	

第5表 銀貨・砥石観察表

回数	遺物	出土位置	種別	石軸	形状(cm)		底成	土色	調査		備考
					底径	高さ			内面	外面	
10	1T 5A-5	1層	銀貨	鋸歯状	6.2	2.7	1.8	42	銀貨は表面と底の凹		
108	2T 3B-2	銀盤	銀貨	鋸歯状	3.5	9.8	0.1	3	銀元は表面と底の凹	ナダ	銀元文
111	2T 29-1	銀盤	銀貨	鋸歯状	48.9	16.5	15.5	ナカサギ	ナダ	銀元文	銀元文

図 版

凡例

- 1 遺構図・遺物図中のスクリーントーンは以下のものを示す。

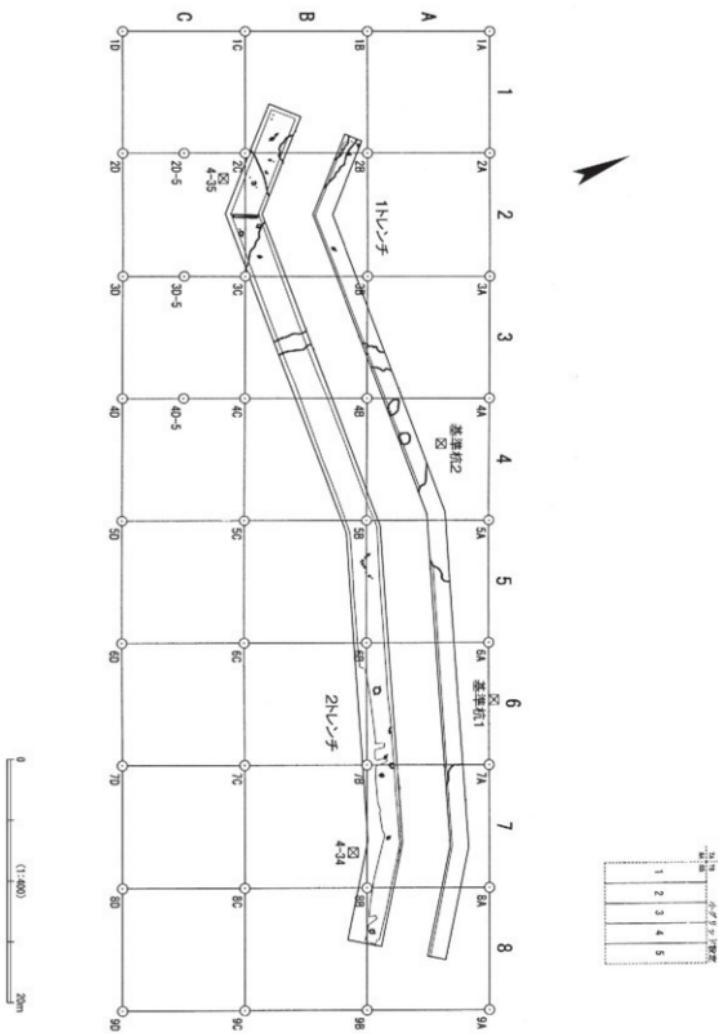


- 2 遺物の番号と縮尺は、写真図版と図面図版とで統一してある。

- 3 土層の土色観察は、『新版 標準土色帖 2003 年度版』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修)を用いた。

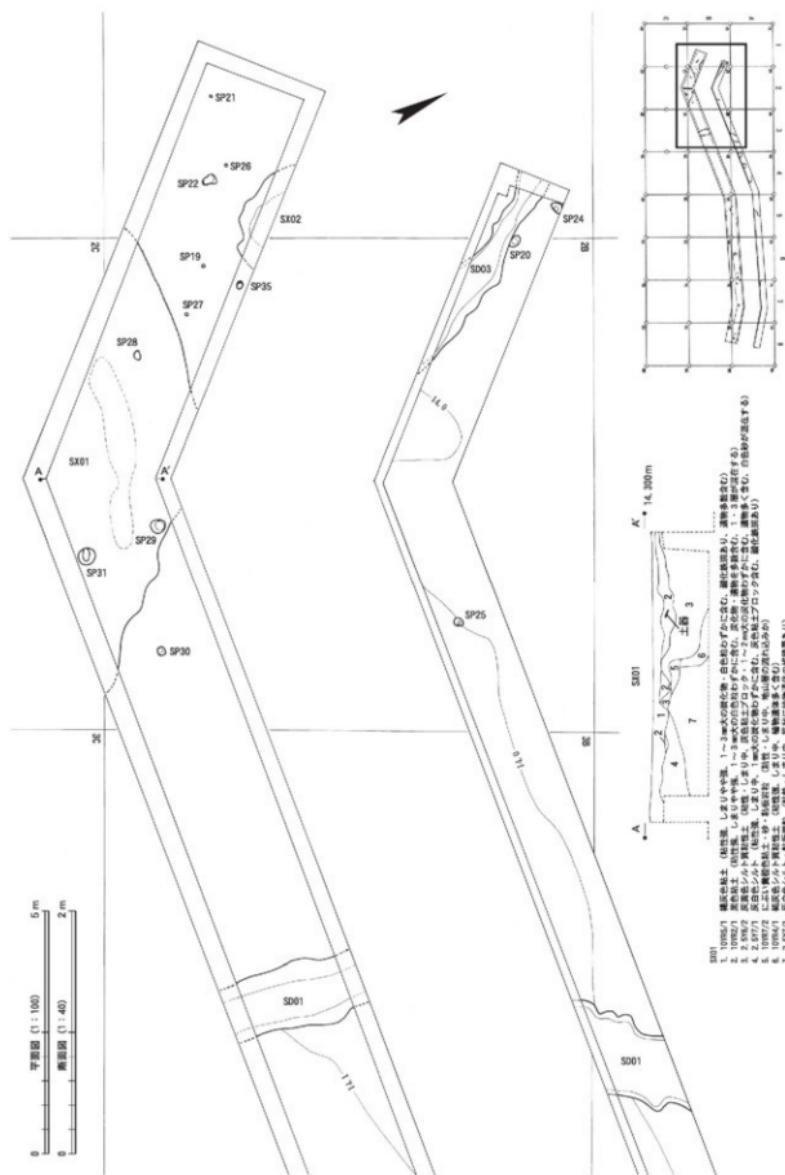
図版 1

調査区全体図



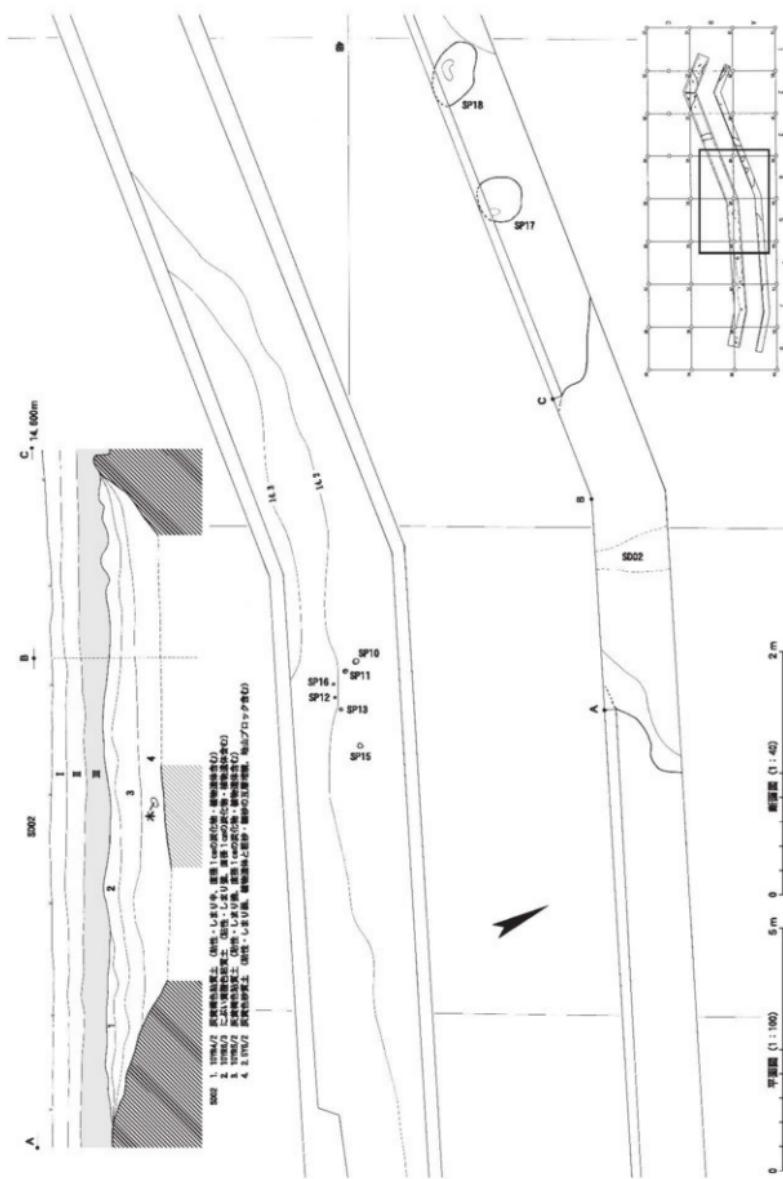
遺構分割図(1)

図版2



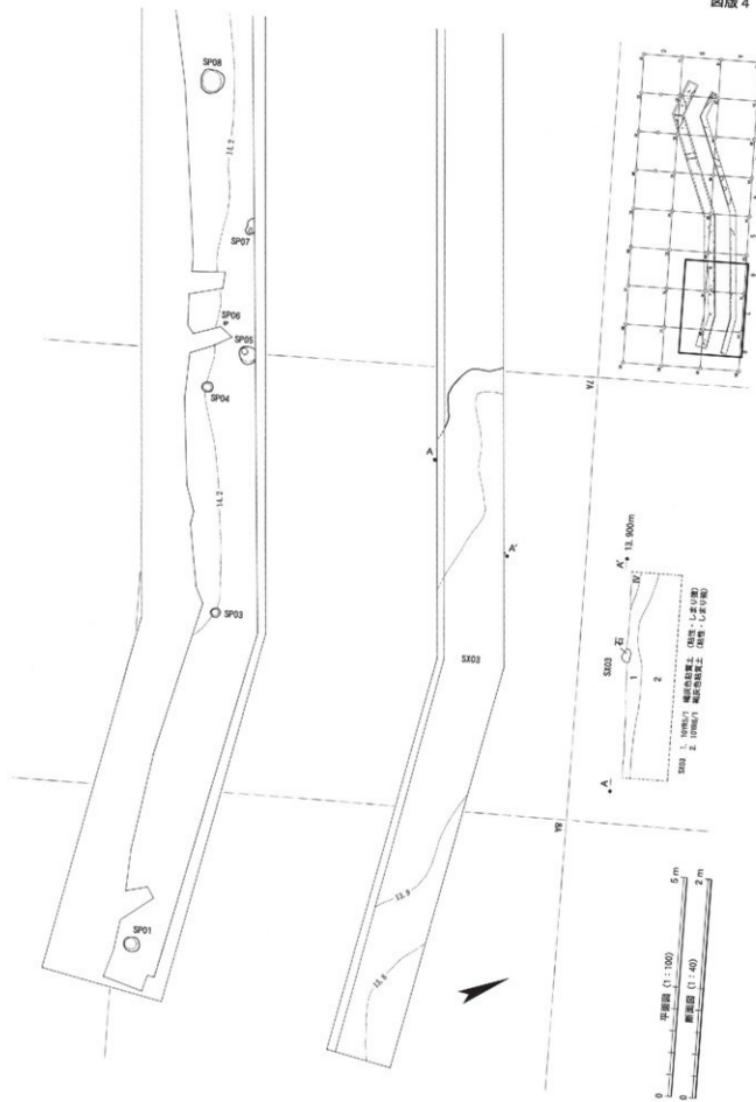
図版 3

遺構分割図（2）



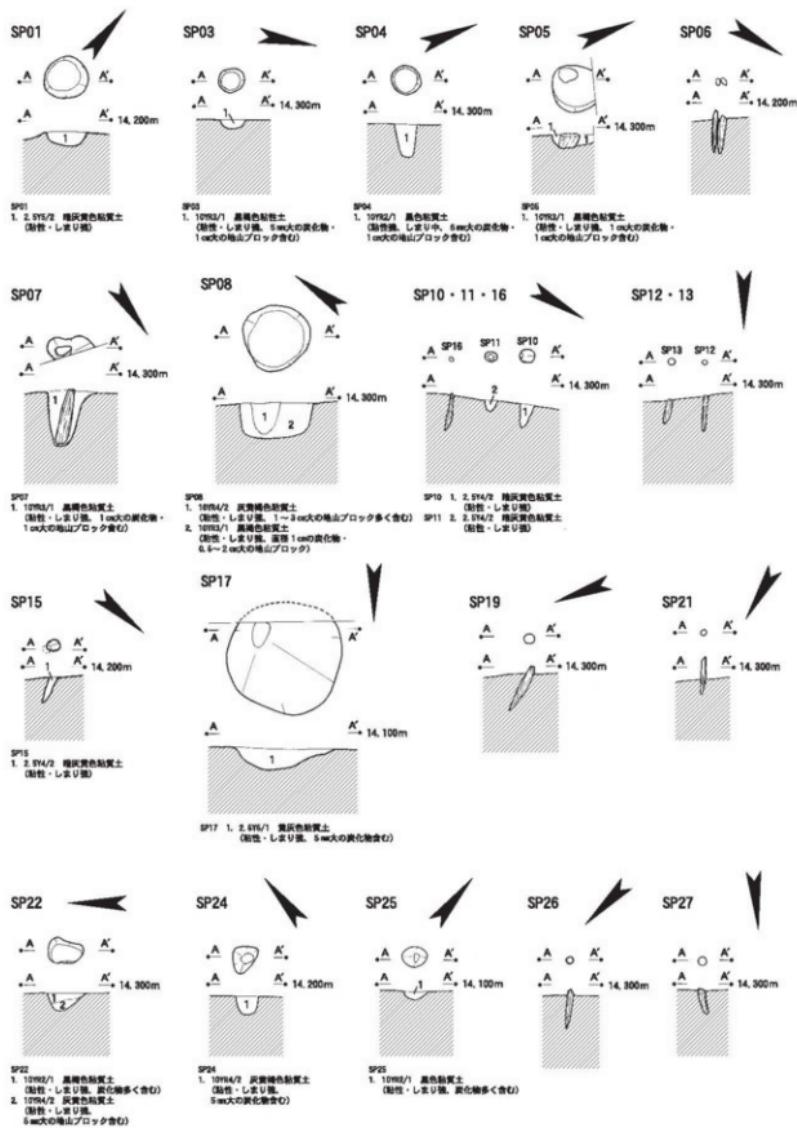
造構分割図 (3)

図版 4



図版 5

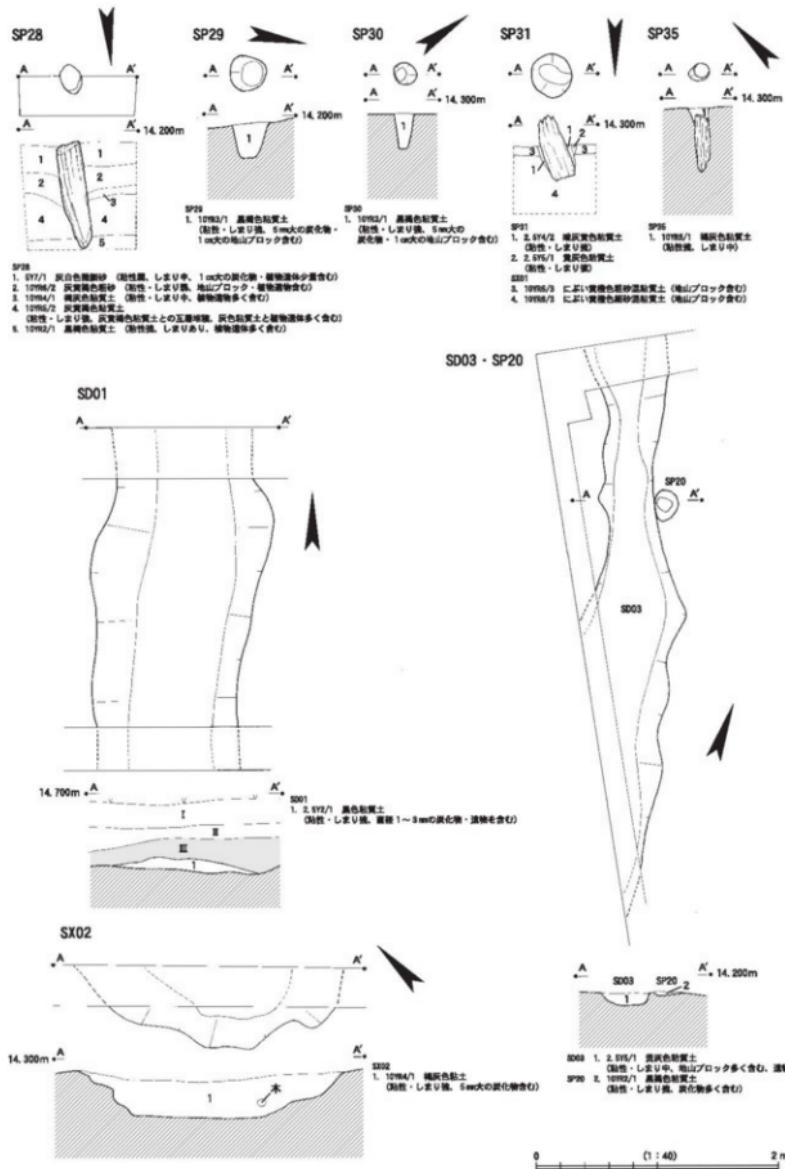
遺構詳細図（1）

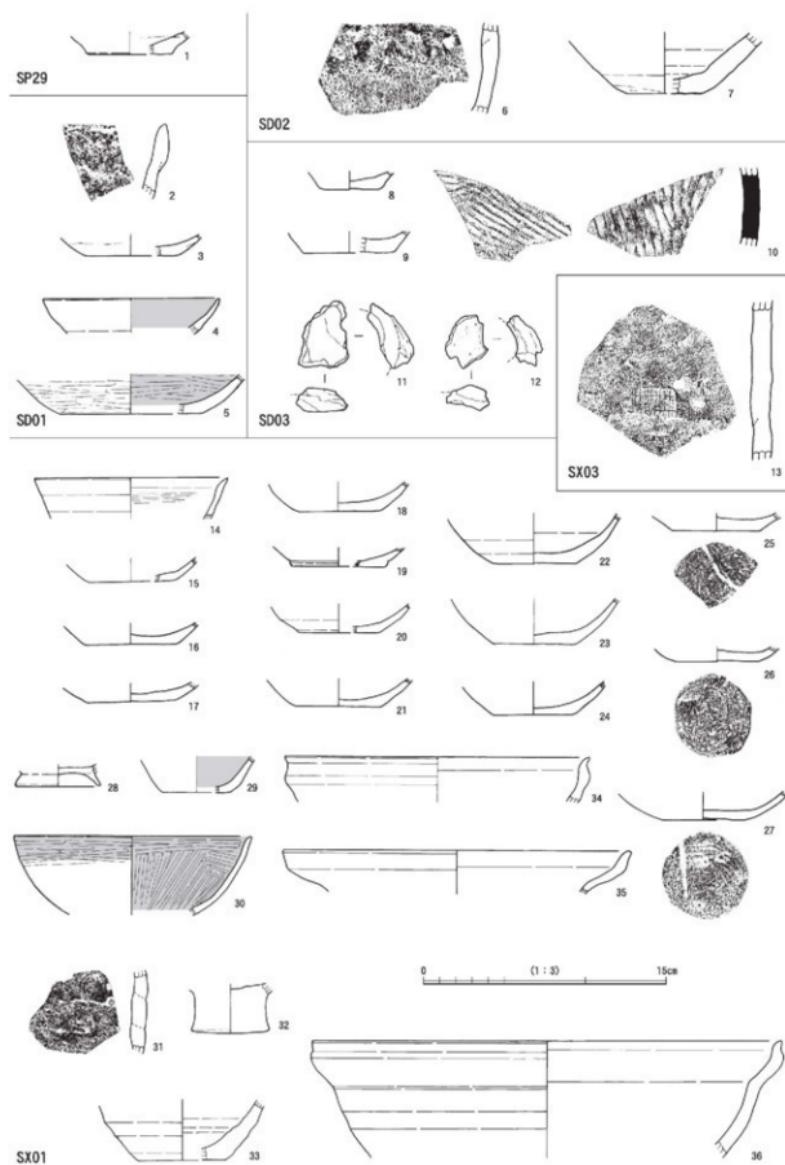


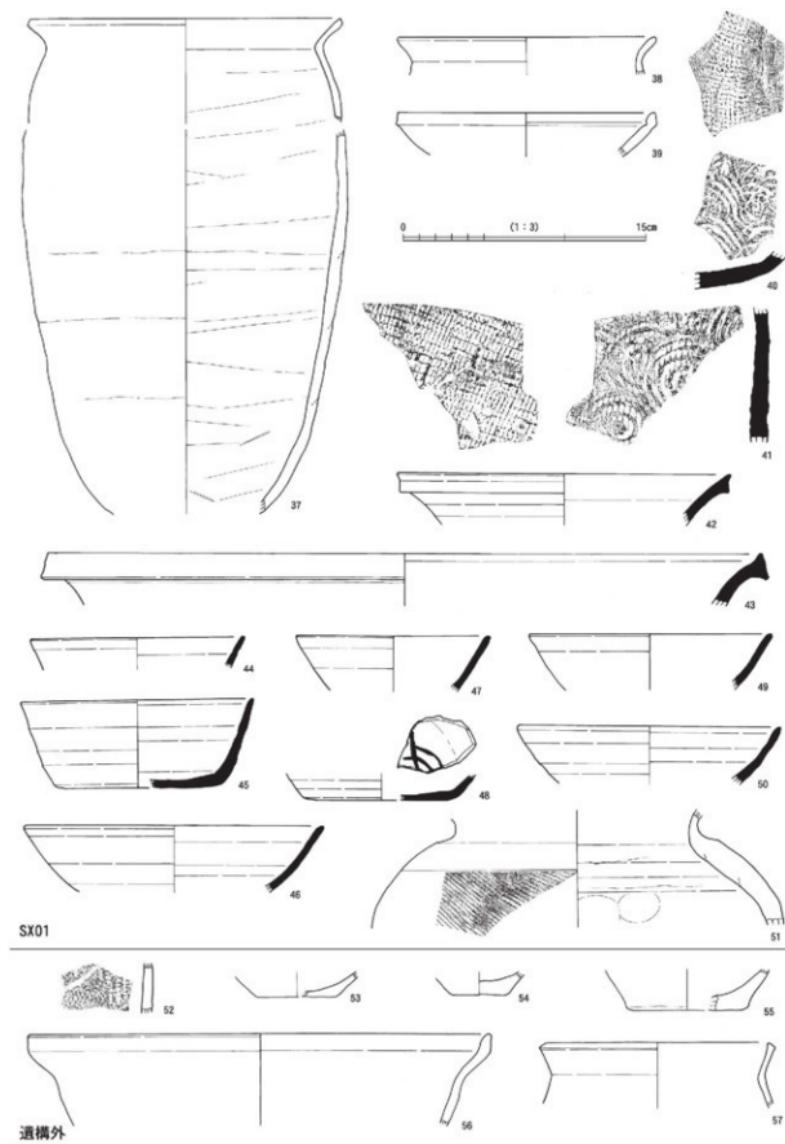
0 (1:40) 2 m

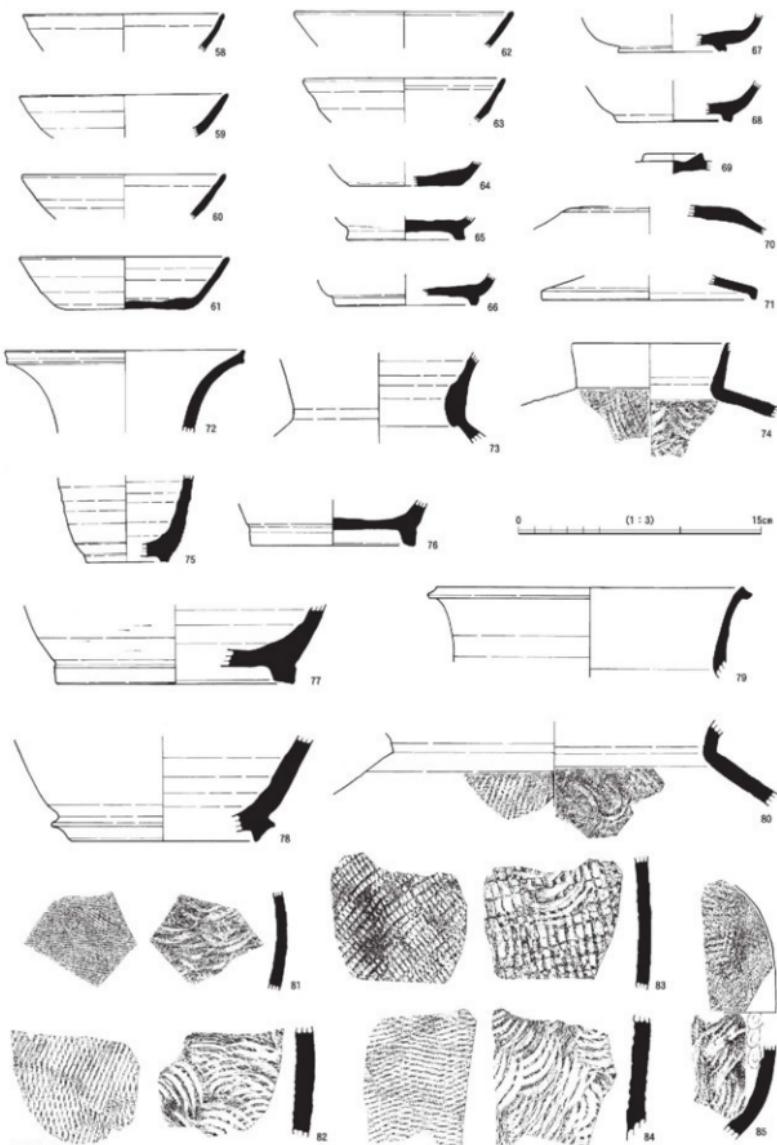
断面詳細図(2)

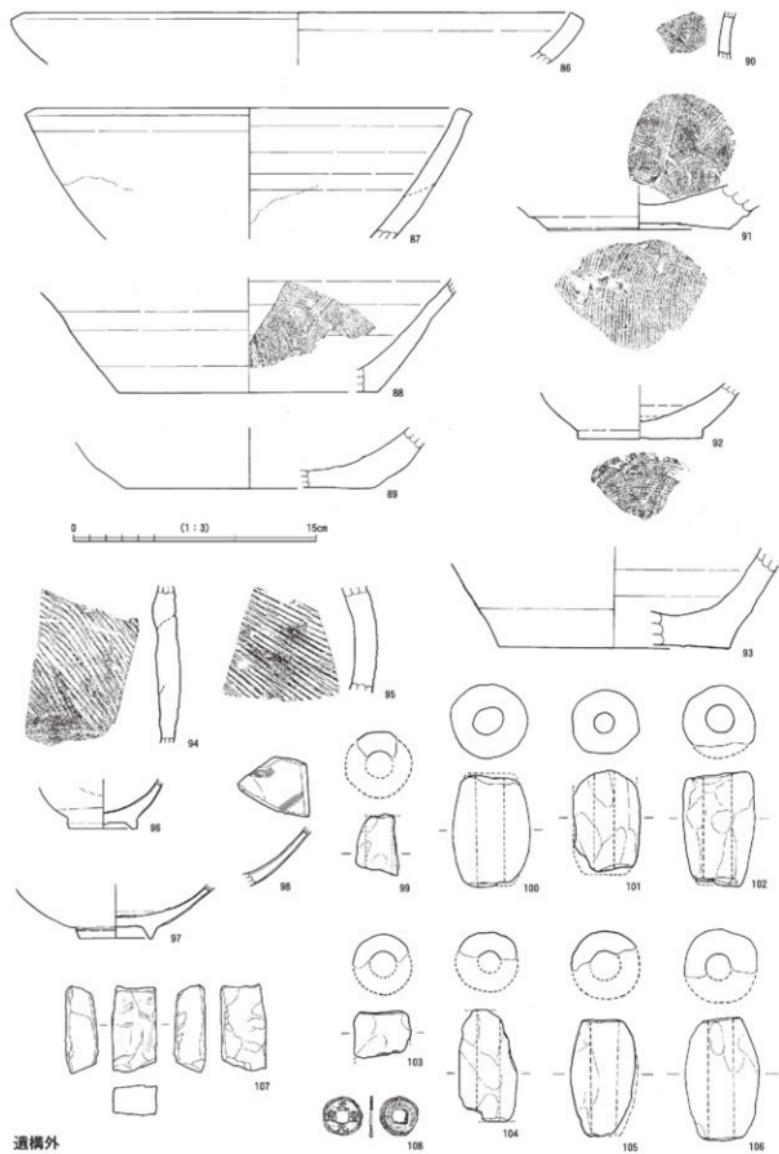
図版6

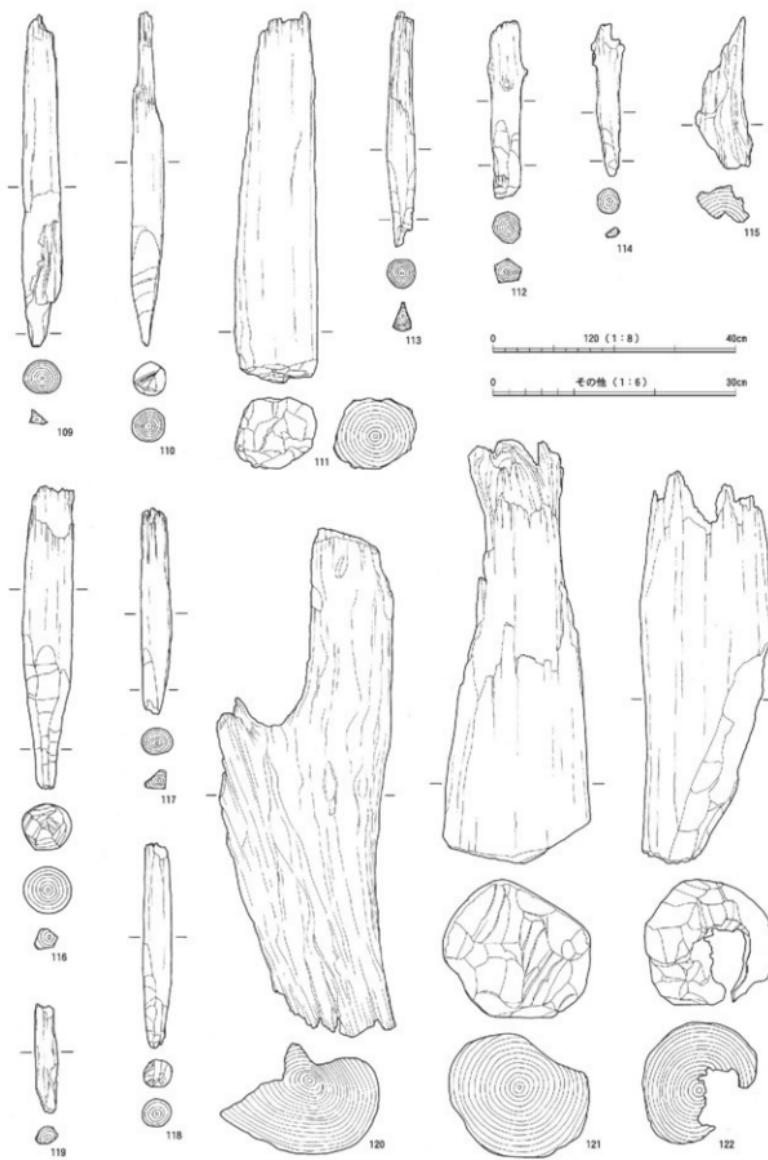














遺跡全景（北から）



遺跡全景（西から）



1T 2B-1基本層序



1T 6A-1基本層序



2T 2B-3 III層包含層物出土状況（北西から）



2T 2B-3 III層上面土錠出土状況（北東から）



2T SX01検出状況（北から）



2T SX01遺物出土状況（北から）



2T SX01完掘状況（北から）



2T SX01完掘状況（東から）



2T SX01セクション（東から）



1T SD03遺物出土状況（南東から）



1T SD01セクション・遺物出土状況（北東から）



2T SD01セクション・遺物出土状況（南から）



1T SD02セクション・完掘状況（北東から）



2T SX02セクション・遺物出土状況（南西から）



2T SP06セクション（北東から）



2T SP07セクション（北から）



2T SP10・11・12・13・16セクション（北から）



2T SP19セクション（北東から）



2T SP26セクション（北西から）



2T SP28セクション（北から）



2T SP31セクション（北から）



2T SP35セクション（南西から）



2B付近完掘状況（北西から）



4A-5A付近完掘状況（北西から）



8A付近完掘状況（南東から）



遺跡見学会（平成23年6月19日）



表土除去作業



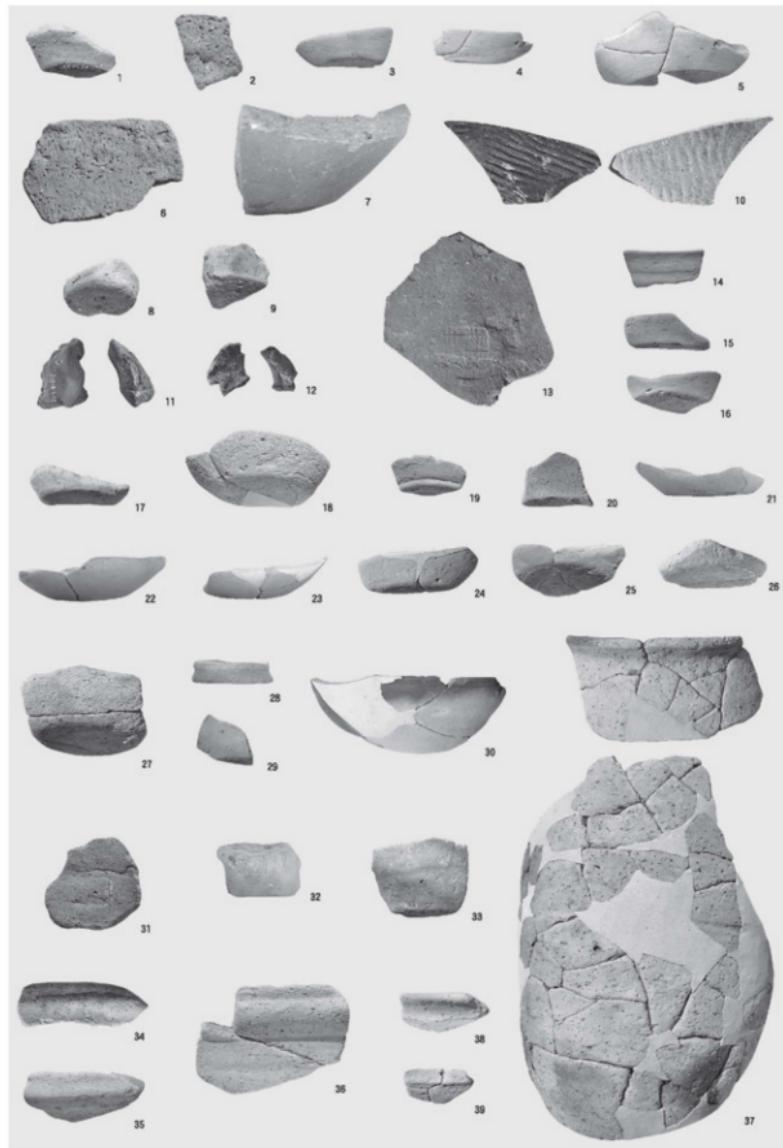
遺構発掘作業

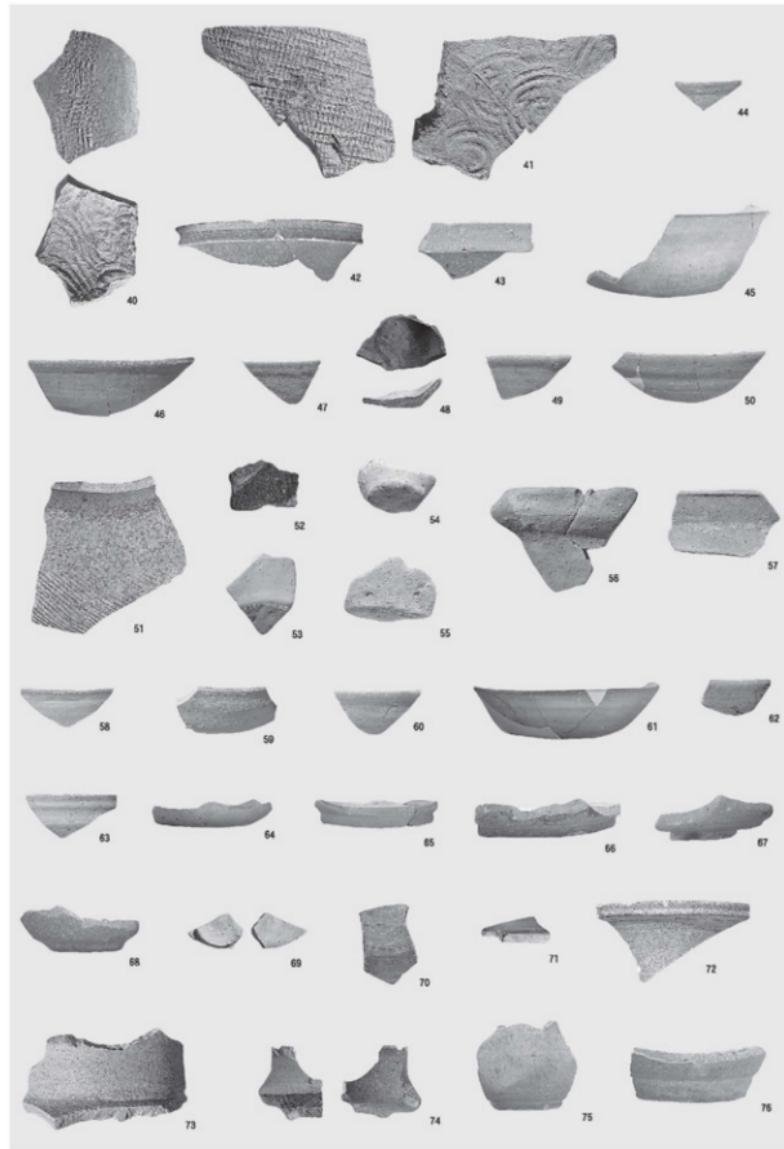


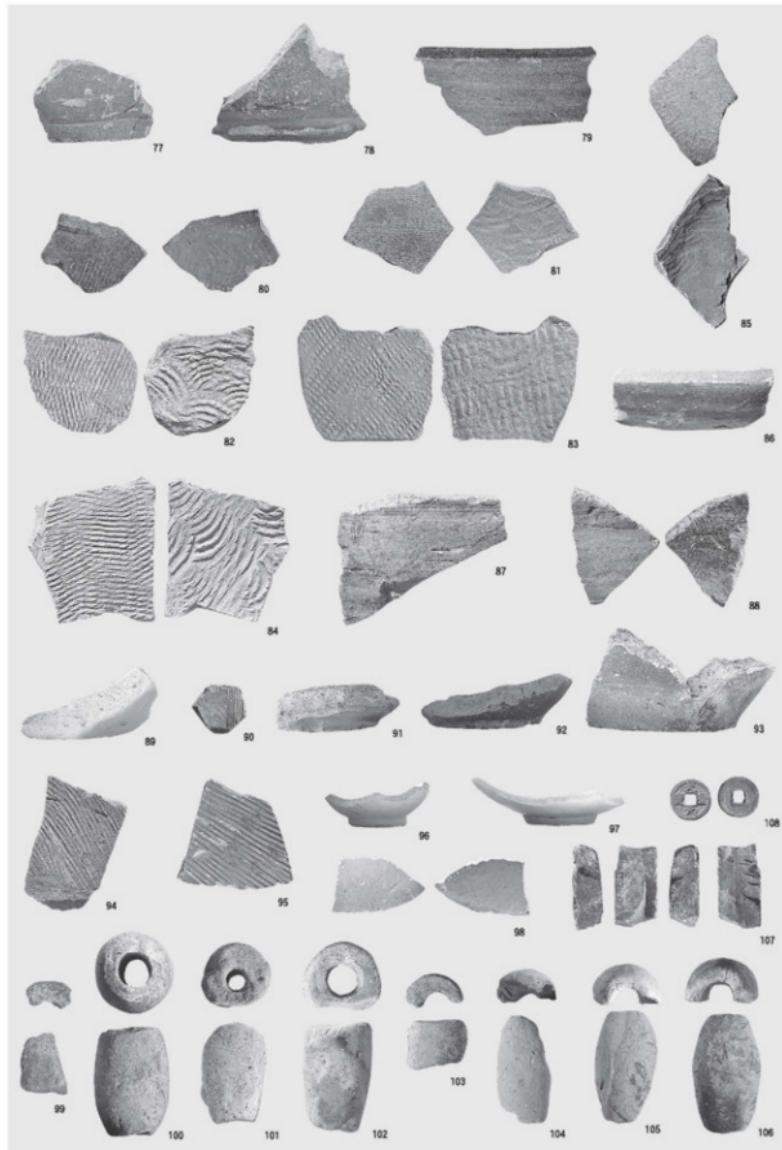
遺物整理作業

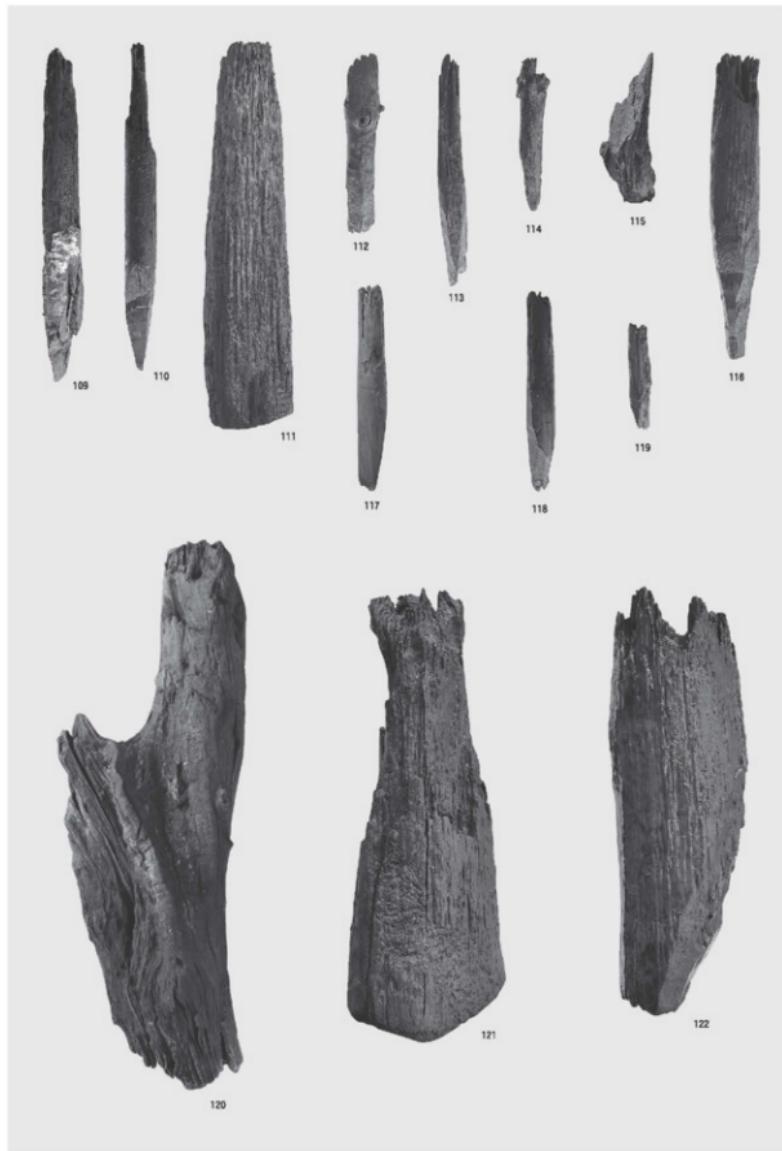


調査に参加した皆さん









報告書抄録

ふりがな	てんのういせき							
書名	天王遺跡							
副書名	県営経営体育成基盤整備事業（潟4期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
翻訳者名	加藤由美子 松井 智							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2013年3月15日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
てんのういせき 天王遺跡	新潟県長岡市 てらどりわらじいわ 寺泊白岩	15021	1285	37° 39' 05"	138° 47' 57"	20110602 ～20110711	300m ²	県営経営体育成 基盤整備事業 (潟4期地区)
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
てんのういせき 天王遺跡	遺物包含地	古代・中世		土坑・溝・ピット		土師器・須恵器 珠洲焼・土鍋 鉄斧・宋鉢		小泊窯産須恵器 や土鍋が出土。

天王遺跡

県営経営体育成基盤整備事業（潟4期地区）に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成25(2013)年3月15日 印刷

平成25(2013)年3月15日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 あかつき印刷株式会社